

□2月23日説教(隅野徹牧師)短縮版

「叫びながら神についていく」(マタイ15:21～31)

イエスに無視され、救いを拒否されても、母親は娘のために決して後へ引こうとはしませんでした。むしろ、イエスの前に出て行って、身を投げ出して拝みながら、「主よ、わたしを助けてください」と懇願しました。なぜ「娘をお救いください」ではないのかも思います。22節でも「わたしを憐れんでください」でした。娘の苦しみは私の苦しみです、という母親の愛の表れとも受け取れます。けれども、それ以上のことが彼女の言葉に現れています。

異教徒であるはずの彼女は、「主よ、ダビデの子よ」とイエスに向かって叫んでいます。「主」も「ダビデの子」もイエスが聖書に約束されたメシアであることを直接言い表しています。ファリサイ派の人々や律法学者たちの口からは聞かれなかった呼び名です。また、「わたしを憐れんでください」「わたしを助けてください」との呼びかけは、イスラエルには親しい、神への呼びかけです。

そして「小犬」とはひどい言い方にも聞こえます。しかし母親の方はどこまでも謙虚にイエスに向かいました。それをそのまま受け止めて「その通りです」と答えます。食卓から落ちるパン屑には小犬もあずかることができるという信仰…主イエス・キリストのみが、救いを与えて下さる唯一の方であることを確信して、熱心に求めているのです。神の恵みを執拗に求める、イエス・キリストだけが人間の困窮を癒して下さるだろうという揺るがない信仰です。イエスはこの姿を見て、「あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」と言われました。そしてその時、娘の病気はいやされました。イエスはこのカナンの女の願いを叶えられたのです。(終)